

## 庭田の落葉 : 文苑

著者	溪川
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 2
ページ	4 9 - 5 2
発行年	1897-12-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5000">http://hdl.handle.net/2298/5000</a>

しく、花な、まも、そ、こ、に、く、ま、なく、生、ひ、茂、れる、水、際、を、ゆ、け、ば、履、も、ど、よ、り、水、鳥、の、た  
ち、あ、かり、たる、いと興、あり、けり、かくて二つの山を越え行けば、やがて池見ゆ、高き峰  
峯、其、傍、に、重、り、合、ひ、て、夕、日、の、影、も、いと小暗きに、敷しらす楓の松の碧に打交りて、青  
地の錦をひろけたらんやうなる、鳥のなく音もきこえず、あたりいと淋え、池の面は  
一つらの鏡なまて、半枯れたる村葦のはかなく打伏したる、よろづ見所あり、ままて  
水に映れる樹々の梢、波にたよふ水鳥の影、殊にいさきよし、其東の岸邊には、大  
なる岩の苔むしたるに、紅葉のちりかゝりたる、自からなる螺鈿と見ゆるも心にく  
え、いかなる人にかあらん、供人二人三人打つれたる、綱など投げ居たるさま、またこ  
れ、書、中、の、人、なり、あなたを見れば、行脚の僧一人、遙に溪間を行く、ま、ま、立、澤、の、景、色、も  
を、い、る、思、ひ、出、で、ら、れ、て、心、な、き、身、に、も、哀、ぞ、し、ら、れ、け、る、い、つ、し、か、日、も、名、残、な、う、入、り  
果て、夕、日、の、影、は、見、え、夕、か、ら、す、の、聲、の、そ、ろ、ろ、身、に、し、み、渡、れ、は、か、た、へ、に、散、れ、る、槇  
の、枯、葉、の、大、なる、に、は、か、な、き、う、た、か、き、記、る、し、て、池、の、水、に、流、し、た、る、ぞ、け、ふ、の、手、む、げ  
な、り、げ、る、

## 庭田の落葉

溪川

秋風にたゞ散りまよふ柏木の

にはたの落葉やきなましものを

文科合同親睦會席上作歌

暗を照さん 月のみね、

隠くすみそらの くるくもを、

拂ふは たれの 手なるらん。

暑さになやむ 世の中の、

草葉の上に つゆのたま、

そゝくは 誰の なみだかや。

かゝらんものはと 天津空、

さかつきあけて みさくれは、

北斗の星の たかきかな。

樟 鹿

吹きよわる み空のあらし、

露原の つゆとま消えて、

谷川の なかるゝ水も、

夕ぐれの おなじ心に、

はかなくも 見ゆらんものを。

紅葉する 垣はの森に、

さをしかの 木ひよ と聞けば、

外山には 月も出でたり、

その月の 明かき山路を、

こよひまた 妻とひするか。

うれしくも 身は なきままでに、

ゆふべく 戀するみれば、

ゆかしくも をかしかりける 世にこそありけれ。

友人某卓落の氣あり、事によりて

我校を去らんとす、賦して其行を送る

我むらさきもの こころには、

月日かゝれば あめつちの、

行きのまにく 玉ほこの、

道は 開けて ありぬべし。

世は他の世にあらぬなり、

我世になして己がしよ、

爲さば成らんを世の人は、

心おくれて残念めしや。

けふたつ君が旅衣、

吹くやつくしの松浦がた、

くもに消えゆく海原の、

ながめはるけき別れかな。

硯友會和歌

月前雁 (兼題)

時雨する音ときよしは羽風にて月を横きるかりのひとつら  
弓はりの月影くらき雲間より聲はかりして雁なき渡る  
物思ふ身にしあればや照る月のとわたるかりのなつかしき哉  
雲はれてそら澄み渡る月かけにまはしくまどる雁の一つら  
夜もすから鳴きてそわたる雁かねも隈なくすめる月にうかれて

基 錦 一 蘆 月  
紀 山 心